

下思想史の大著を學界に惠まれる日を切に待望したい。〔三十一年二月刊・岩波書店・全書版、14+273+42頁〕（櫻井）

◇ 法然上人傳の研究

田村 圓澄著

著者は既に、雜誌「佛教史學」(二)の(一)や「佛教文化研究」(一・二)に、その斬新な研究成果を發表して來た。當書はそうした既往成果をも集録し、法然傳全體を鳥瞰しようとしている。

當書内容の第一部は、法然傳研究の障礙より起筆し、諸傳記本の成立系譜や傳記作者の立場を克明に論述している。

第二部では、法然の誕生より入寂に至る間を編年し、その間における問題點を逐一、分析考證する。第三部においては、法然傳における諸問題の内、遁世と命名・傳記作者と天台教團・學匠・法然傳に現れた念佛者・遺誡文と起請文・三昧發得記・夢感聖相記・選擇集撰述とその付屬・源空聖人私日記と法然上人傳記(醜稿本)をとりあげ、それぞれ注意すべき所見を披瀝している。

周知の如く、その根本史料を缺く法然傳は、きわまる所、蓋然のたらざるを得ぬが、然し著者はその巨覺の上になつてよく諸傳記成立の系譜と事狀を明かじ、傳記における潤色を是正する事によつて法然傳研究を歴史學の水準にまで高めしめた。客觀的な法然眞傳が、萬人の納得をもつてむかえられる日は、いよいよ遠いであろうが、然し法然傳における傳説生起の根源を、それぞれの時代と作者の立場において科學的に分析しつづけた事は、法然研究史上、一時期を劃したものであるとして永く銘記されるであろう。〔法藏館刊二九五頁七〇〇圓〕 (北西)

◇ 淨土教美術 石田一郎著

◇ 密教美術論 佐和隆研著

凡そ、佛教藝術はそれが佛教信仰あるいは佛教諸儀軌の藝術的表現を試みてゐるのであるから、單なる様式・形式論を中心とする、いわゆる美術史學の理論と方法は、宗教藝術研究の上にはそのまま適應されないといえよう。こうした意味において、本格的に佛教藝術の本質論の

検討を試みたものに石田・佐和兩氏の研究がある。

石田氏の『淨土教美術』は、『文化史學』『人文學』『文化學年報』に掲載された論文を集成補筆されたもので、論旨は主として、氏の提唱する文化史學的考察の上から、淨土教藝術の構成理論を追究している。即ち、日本淨土教美術史の理解を「惠心教美術」「法然教美術」「親鸞教美術」に分類してそれぞれの藝術的表現の教理史的検討を徹底的に検討し、その系譜的關連を「來迎圖の展開」において纏めてゐる。そして、同じく淨土教に屬する惠心教と親鸞教が「一は如來を眞如として靜的に捉えるに對し、二は彌陀を本願力として動的に押えて」いる點を指摘し、その造型藝術展開をかかる教理的理解によると、法然教は惠心教と親鸞教の中間に在つて、廻轉の中樞として惠心教を離轉し親鸞教に裏返へして個人化・内面化したという。氏の論旨は從來、作品第一主義の立場からこれらを一括して淨土教美術として理解した美術史研究に對し、内容の検討から三類に分けて理解し、とくに難解な諸般の教義理